



獨協中学校・高等学校

獨協でしかできない体験 生徒の心に響くドイツ研修

獨協中学・高等学校には、大切にしている海外研修がある。
2017 年度で 5 回目を数えたドイツ研修だ。
五感を使った授業やプログラムで、
生きる意味と向き合い、自分の考えを見つける時間は
国や人種、文化を超えた人と人のつながりの中で培う心の教育。
ドイツとつながりがある同校ならではのドイツ研修について訊いた



ドイツで出会った 心に響く、重みのある言葉

「シリアと聞いて思い浮かべることは何ですか？」

そう問われた生徒たちから出たのは「内戦」や「戦争」と言った言葉だった。「シリアについて、『君たちが何も知らないことが分かりました』と言われて、衝撃を受けました。その後、難民の方の話を聞いて、確かに僕は何も知らないんだと気づいたんです」

そう話すのは川崎翼君（高1）だ。

昨年夏のドイツ研修で、生徒たちはシリア難民から直接話を聞く機会があった。戦火の中で死と隣りあわせて暮らしてきた語り手の言葉に、多くの生徒が少なからぬショックを受けたという。と同時に、自分たちがいかに恵まれ、安全な場所で安穏と過ごしているかを痛感させられた。

そのシリア難民と一対一で話すことができたという高柴敦裕君（高1）は、その時のことをこう振り返る。「なりた職業を訊ねられても、きちんと答えらることができなくて、本気で怒られました。『ちゃんと夢を持って！』と。その言葉が心にずさりと突き刺さって、それからは自分の将来を真剣に考えるようになりました」

多くの人たちが傷つき、命を落としていくのを目の当たりにしながら、明日をも知れぬ状況の中で暮らしてきたシリア難民の言葉は、生徒たちにとってとても重いものだった。

ハノーファー・ライプニッツ大学の研究室を訪問



ドイツ研修を企画し、生徒たちを引率した塩瀬治教諭はこう語る。「本校の生徒たちは純粋な一面がありますから、本物の事実や言葉は“重い”と素直に感じると思います。難民の方に未来を問われて答えられずに言われた言葉は、家族や友人、教師から言われる言葉よりもずっと重みがあり、深く残ります。そういう言葉、話を直接聞けるというのは、どんな学習よりも心に響く経験になります」

文化、人種の違いを感じながら 問題意識を持つきっかけに

獨協中学・高等学校はドイツ文化の摂取移入を目的とした獨逸学協会の事業と



塩瀬教諭。自身、同校の卒業生でもある

して創立された獨逸学協会学校を前身としている。第二外国語としてドイツ語学習を取り入るなど、創立当初からドイツとのつながりが深く、海外を見据えたグローバルな視点による学びに重きをおいている。その中でも、ドイツ研修は同校が大切にしているプログラムのひとつだ。

高2の清水暁陽君（高2）はこれまで2度、参加してきた。「文化や教育、歴史に対する考え方など日本とは全く違うので、とても刺激になり、いろいろなことに対して疑問を持つようになりました。参加するたびに、次はもっと深く現地の人とコミュニケーションをしたい、もっと学びたいという気持ちが強くなるんです」そういう清水君は、今年度のドイツ研修にも参加するという。

ドイツ研修では、ドイツの生活文化や歴史、さらに環境問題や難民問題など多岐にわたって学ぶ。昨年度は、生物から

ケルン大学からの教育実習生によるドイツ語の授業



環境教育にも力を入れている同校では、「緑のネットワーク委員会」が校内で屋上菜園やビオトープ作りに取り組むほか、近隣の小学校を訪れ環境への啓蒙活動を行っている。その活動が認められ、昨年、高校性ボランティア・アワードを受賞（写真左）。今年4月にはノルウェー・リレハンメル自然保護連盟の会員が視察に訪れた（写真右）



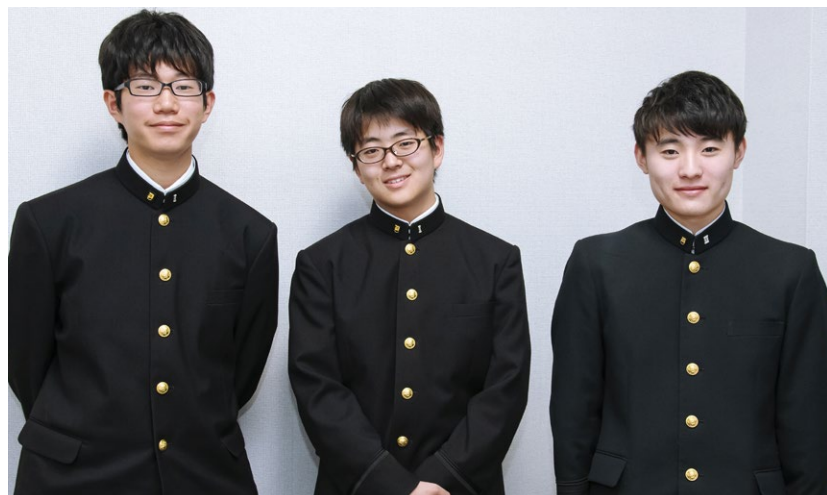
人間教育を学ぶ施設である生物教育園で、実際の生き物を観察しながら五感を使った授業を行った。18年度は生物と人間の共存をテーマに、動物保護施設で生き物の命と向き合ったり酪農体験をするほか、ダッハウ強制収容所へも足を運ぶ予定になっている。ドイツ研修は、“生きる”ことや命の大切さに目を向け、人としてどう生きていくかを考え、学ぶ時間でもあるのだ。「ドイツでの生活を体験すると、日本での生活、日常が当たり前のことではないと疑問を持ちます。国や文化、人種などの違いを感じながら問題意識を持って、柔軟に対応できる頭と心と身体を育ていきたい」と塩瀬教諭はいう。

そして、その思いは現地の教員も共有し、研修の最後には現地教員から「生徒たちはきちんと学べましたか？」と聞かれるそう。だからこそ、研修を受けるのではなく、自らのテーマを持って研修に参加することが大切だという。

今年度もドイツ研修への参加を計画している3人に、自身の研修テーマや目的を訊いてみた。「夢である教師になるための、ドイツの教育を見てくることが一つ。それからグローバル化が求められる中でのコミュニケーション力を培うこと」（川崎君）「まず真正面から会話ができるようにしたい。また日本は戦後の対応などでアジアの国々と分かり合えないことが多いけれど、同じ運命を辿ったドイツはEUの主要国となった。ドイツがどのような対応や考え方をしたのかをテーマにしたい」（高柴君）「海外で生活する夢を実現するために、積極的に自分から自分の意志を伝える時間にしたい」（清水君）

そして塩瀬教諭が、最後をこう締めくくった。「この研修は人間と人間のつながりで出来ています。だからこそ、国を超え、文化を超えたつながりを感じ、その上で生

きていく中でのヒントを感じ、掴み取ってほしい。本校ではドイツ語の授業にも取り組んでいますが、それはドイツとの関わりの歴史と伝統があるからこそ。ドイツとのつながりを持つ獨協でしかできないことを、この研修で続けていきたいと考えています」



左から川崎君、高柴君、清水君。3人とも、今年度もドイツ研修に参加するという